

表紙

2022.9.4 三国志学会大会（早稲田大学）

禹の伝承から見る後漢・三国期四川の地域文化

日本学術振興会特別研究員 PD

新津健一郎

<本報告について>

- ・この研究報告は、特別研究員奨励費（22J00586）の成果の一部です。
- ・未定稿ですので、報告内容の引用や無断転載、資料の転送等はお控えください。
 - *内容には注意を払っていますが、誤記や口頭発表時のミス等について質疑応答等の中で訂正／見解の修正を行うこともありえます。アーカイブをご覧になる際は留意をお願いします。
- ・会場での口頭発表は、配布資料（本冊子）に基づいて進行する予定です。スクリーンは、資料の該当部分を示すメディアとして使用します。
- ・配布資料はレジュメ1部（本冊子、全15ページ）です。

<配布資料(本冊子)目次>

はじめに……	1
第一章……	2
第二章……	5
第三章……	9
おわりに……	12
注釈……	13

<内容要旨>

上古の聖王として知られる禹についてはさまざまな伝承がある。その一つに、現四川省西部山岳部の民族地帯に位置する「石紐」を生地とする説がある（「禹生石紐」説）。この言説は、従来、歴史地理・古史研究・民族史といった視点から取り上げられてきたが、本報告ではこれを史料批判的かつ歴史的に分析し、さらに、そうした書物が出現する地域・時代背景との関連を検討する。それによって、「禹生石紐」説は、後漢・三国期の歴史展開を背景とし、四川における地域文化と密接に関わりつつ形成・記録されたという性格を帯びることを明らかにする。

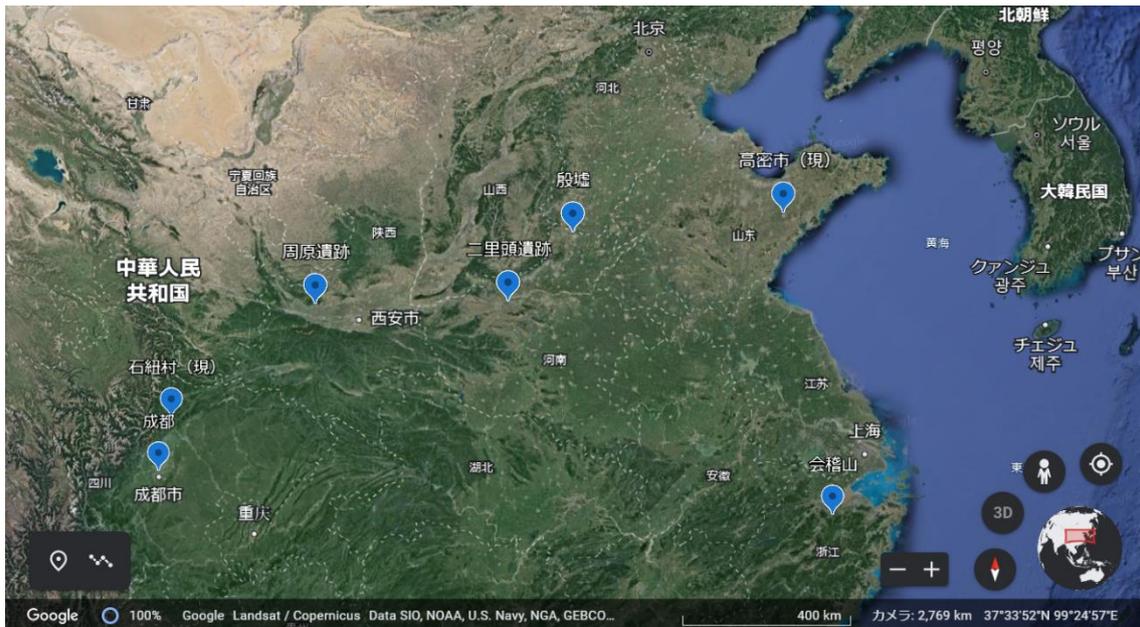
禹の伝承から見る後漢・三国期四川の地域文化

日本学術振興会特別研究員 PD

新津健一郎

はじめに

- ・禹...夏王朝の始祖とされる人物。治水や地理に関わる神としても知られる。
 - *父の鯀は治水に失敗。鯀の子・禹は治水に成功し、舜から帝位を譲られた。禹は子の啓（開）に位を伝え、以後世襲により王位を継承した¹。
 - 『尚書』禹貢篇（各地の地誌）、呪法（「禹歩」）との関連など様々な側面を持つ²。
- ・禹に関する記述は『史記』夏本紀、『尚書』など諸書にみえるが、異説や異伝が多い。
 - その中に、禹が西方の「石紐^{セキチュウ}」という地で誕生したとする説（「禹生石紐」説）がある。
 - ※他に、出生地を明言しない西方出身説・西方異民族出身説もある。また、生地を明言する言説には高密（山東？）など別方面の土地で生まれたとするものもある。



(参考地図：周以前の主要遺跡等と現在の石紐村／Google Earth)

- ▼「禹生石紐」説：司馬彪『統漢志』郡国・蜀郡広柔県・劉昭注 ※広柔県についての注
- 『帝王世紀』に曰わく、「禹は石紐に生まる。縣に石紐邑有り」と。『華陽國志』に曰わく、「夷人其の地に營し、方百里、敢えて居牧せず。過有りて其の野中に逃るれば敢えて追わず、禹神を畏ると云う。能く藏ること三年せば、人の得る所と為るも、則ち共に之を原し、禹神の靈 之を祐くと云う」と。（帝王世紀曰「禹生石紐。縣有石紐邑」。華陽國志曰「夷人營其地、方百里、不敢居牧。有過逃其野中不敢追、云畏禹神。能藏三年、為人所得、則共原之、云禹神靈祐之。」） ※参照版本は第二章参照
- * 広柔県...四川省綿陽市西部または阿壩藏族羌族自治州。 * 『帝王世紀』...西晋・皇甫謐撰。帝王の

伝説や事績を整理。 *『華陽国志』…東晋・常璩撰。四川地方志。

・「石紐」…現四川省綿陽市西部、北川羌族自治県に石紐村という地名が残る。

→「禹生石紐」説は漢代以後の文献に散見し、史書や経書の注釈にも引かれる。「石紐」(地名)ではなく「石」から生まれたとする文献、「石紐」では禹の聖地がアジュール(通常の法規範から自由な場:前掲史料後段『華陽国志』)になっているとする記述も³。

・これに関する先行研究:

・真偽について/「石紐」の位置比定(←禹の存在をめぐる議論)

…1930-40年代の古史研究、20世紀後半の地域史研究⁴

→現四川省綿陽市北川羌族自治県または阿壩藏族羌族自治州?

・説話の意義/背景について(←人類学・民族史・集合的記憶に関する議論)

…羌族の来歴に関する研究、先秦史の検討/再構成⁵

→工藤元男「禹を運んだ道」(『中国古代の法・政・俗』汲古書院、2019年):

*禹の神話の原型は新石器時代に遡る洪水神。その神話は羌に伝わり、羌の一部は戦国時代以後、神話を伝えつつ西北中国から西南に移動した。そこで、西南山岳地帯の岩がちな景観や死生観と結びついた二次神話として石中誕生譚が形成され、またその神をアジュールの神とする信仰が派生した。

※「石紐」は地名であるが、同時に「石縫の走る荒地」でもあると解釈。

・疑問点:

・羌の伝承であるとしても、漢籍に記録されている。どのようにして文献に記述が残ったのか(史料批判・文献学的問題)

・伝承の成立及び記録の背景に地域性/時代性を想定することはできないか。

→「石紐」に接する四川地域の文化、「禹生石紐」説を引く文献が現れてくる後漢・三国時代の社会状況と関連するのではないか?(地域社会史的問題)

◆史料批判的(文献学的)分析を基礎に、地域社会(現地の漢人社会)との関連を検討する。

第一章 禹の出生をめぐる漢代の諸説と「石紐」

本章では、禹の出生をめぐる諸説について、漢代(主に漢代前半期)の文献とその注釈を整理して概要を確認するとともに、「禹生石紐」説の位置づけを示す。

(1)『史記』とその注釈

▼『史記』卷2夏本紀

夏禹、名づけて文命と曰う。禹の父は鯀と曰い、鯀の父は帝顓頊と曰い、顓頊の父は昌意と曰い、昌意の父は黄帝と曰う。禹は、黄帝の玄孫にして而して帝顓頊の孫なり。(夏禹、名曰文命。禹之父曰鯀、鯀之父曰帝顓頊、顓頊之父曰昌意、昌意之父曰黄帝。禹者、黄帝之玄孫而帝顓頊之孫也。)

▽『史記索隱』系本「鯀取有辛氏女、謂之女志、是生**高密**」。宋衷云「高密、禹所封國」。 ※系=世(避諱)、『世本』は漢初までに成立、宋衷は後漢末の人。

▽『史記正義』帝王紀云「父鯀妻脩己、見流星貫昴、夢接意感、又吞神珠薏苡、胸坼而生禹。名文命、字

密、身九尺二寸長、**本西夷人也**。大戴禮云『高陽之孫、鯀之子、曰文命』。**揚雄蜀王本紀云『禹本汶山郡廣柔縣人也、生於石紐』。**⁶

括地志云「茂州汶川縣**石紐山**在縣西七十三里。**華陽國志云『今夷人共營其地、方百里不敢居牧、至今猶不敢放六畜』。**」

→*『史記』本文が取り上げるのは父系の系譜のみ。注釈が生地について諸説を引く形。

*『世本』は高密（現山東省高密市、または河南省鄭州市⁷）の生まれ、とする。

*皇甫謐『帝王世紀』は、禹の母（脩己）が流星を見て懐妊し〔感生〕、神珠を飲み、胸を割いて禹を生んだこと〔異常出生〕、また「夷」の出身であること〔異民族出身〕を記す。

*『帝王世紀』が引く漢・揚（楊）雄『蜀王本紀』は禹の出生地を汶山郡広柔県（＝漢代の蜀郡広柔県）の「石紐」とする（→「禹生石紐」説）。ただし、この記述を揚雄（前漢末の蜀郡の人。文人として著名）の手になるものとするには疑問あり（後述）。

*唐・李泰『括地志』は茂州汶川県の西に「石紐山」があるとして、常璩『華陽国志』佚文を引く。『華陽国志』は、現地は夷人の暮らす空間であり、居住・牧畜を避ける百里ほどの空間があると述べる。

→『史記正義』は禹の西方出身／禹生石紐説を踏まえた注釈といえる。

▼『史記』卷15 六国年表

夫れ事を作す者は必ず東南にし、功實を收むる者は常に西北にす。**故に禹は西羌に興り**、湯は亳に起ち、周の王たるや豊鎬を以て殷を伐ち、秦の帝たるや雍州を用て興り、漢の興るは蜀漢よりす。（夫作事者必於東南、收功實者常於西北。**故禹興於西羌**、湯起於亳、周之王也以豊鎬伐殷、秦之帝用雍州興、漢之興自蜀漢。）

▽『史記集解』皇甫謐曰「孟子稱禹生石紐、西夷人也。傳曰『禹生自西羌』是也。」

▽『史記正義』禹生於茂州汶川縣、本丹駟國、皆西羌。

*本文は禹の西方出身・異民族出身説を踏まえた記述であり、注釈もそれに関する言説を挙げる。『史記集解』に引く皇甫謐の言は「禹生石紐」説だが、「孟子稱」以下は現行の『孟子』（及びその伝）にみえない⁸。

◆『史記』本文は、禹の出自について父系の系譜と西羌の人とする説を記すが、母親や出生経緯には言及しない。これらについては注釈の中に諸書の説が引かれ、その中に禹の西方出身・異民族出身説・「禹生石紐」説が含まれる形となっている。 ※現行『尚書』本文（経文）は生地には言及せず。

◆「禹生石紐」説：夏本紀に対する注釈（『正義』）が、禹の身元について揚雄の撰とされる『蜀王本紀』を引く。また、夏本紀・六国年表の注釈（『正義』『集解』）は、ともに皇甫謐『帝王世紀』の「禹生石紐」説関連箇所を引く。

※揚雄：紀元前後→皇甫謐：3世紀→常璩（『華陽国志』）：4世紀、裴駟（『史記集解』）：4・5世紀
→西羌出身説は『史記』成立までに流布、「禹生石紐」説は揚雄の時期（前漢後半期）までに出現？
では、『史記』以外の漢代文献の記述はどうか？（揚雄より早い例は存在するか？）

(2) 漢代の諸書に見える禹の出生——とくに異民族出身説と異常出生説

A. 西羌出身説 [括弧内は参照版本]

▼韓嬰『韓詩外傳』卷5第28章（許維適集積、中華書局、2020年）

子夏曰「臣聞黃帝學乎大填、顓頊學乎祿圖、……**禹學乎西王國**、湯學乎貸子相、文王學乎錫疇子斯……。」

※『荀子』大略（新釈漢文大系、明治書院／新編諸子集成、中華書局）

堯學於君疇、舜學於務成昭、**禹學於西王國**。

▼陸賈『新語』術事（新編諸子集成、中華書局）

文王生於東夷、**大禹出於西羌**、世殊而地絕、法合而度同。

▼桓寬『塩鉄論』国疾（新編諸子集成、中華書局）

賢良曰「……**禹出西羌**、文王生北夷、然聖德高世、有萬人之才、負迭群之任、……。」

▼劉向『新序』雜事（石光瑛校積、中華書局）

雜事一：禹之興也、以**塗山**。 ※塗山：長江下流域。

雜事五：（子夏曰）「……堯學乎尹壽、舜學乎務成附、**禹學乎西王國**、湯學乎威子伯……。」

*前漢時代成立の文献に、西方出身／異民族出身／西方で修学、といった言説が見える。

B. 「石紐」／「石」にかかわる出生説話

▼『淮南子』修務訓（新釈漢文大系、明治書院／新編諸子集成、中華書局）

禹は石より生まれ、契は卵より生まる。（（若夫堯眉八彩、九竅通洞、而公正無私、一言而萬民齊、……禹耳參漏、是謂大通、興利除害、疏河決江、……。）**禹生於石**、契生於卵。）

※高誘注：禹母修己、感石而生禹、坼胸而出。

*禹と契（セツ、殷王朝の始祖）の異常出生を併記し、後漢の高誘が異常出生を注記する。ただし、この「禹」は「啓」に作るべきとする見解がある。引用部を含む段落の前段に既に禹への言及があり、啓には他書にも石から生まれたとする説話があるため⁹。

▼『漢書』卷6武帝紀・元封元年（版本は注釈を参照）

[春正月、行幸緱氏。詔曰]朕 華山に用事し、中嶽に至りて駁麋（ロクホウ）を獲、夏后の**啟母石**を見る。……。（春正月、行幸緱氏。詔曰「朕用事華山、至於中嶽獲駁麋、見夏后**啟母石**。……。」）

*緱氏は現河南省洛陽市内（華山・中岳も近隣に所在）。

→顔師古の注に、禹の子である啓が石から生まれた（または啓の母が石になった）とする説が記載される。また、後漢延光二（123）年の開母廟石闕銘（洛陽市の東に接する鄭州市に現存）から、後漢時代の中岳で啓（開）母が祀られたことがわかる¹⁰。

▼『藝文類聚』卷6石所引『随巢子』（中華書局）

禹は崐石に生まれ、啟は石より生まる。（**禹産於崐石**、啟生於石。）

*崐=崑崙。崑崙（西方の名山）で生まれた、という意か、ただし、前半が場所、後半が異常出生を言っているとする対句としてはいびつか。

※『北堂書鈔』卷一帝王所引『帝王世紀』「帝堯生石乳、禹生石紐」

▼焦延壽『易林』卷1、2など（複数箇所にはほぼ同文／藝文印書館）

舜は大禹を**石夷の野**より升し、徴して王庭に詣り、拜して水土を治めしむ。（舜升大禹**石夷之野**、徴詣王庭、拜治水土。） ※石夷、石だらけの平地の意か。

*石から生まれた、石だらけの地で生まれた、西方の石で（から？）生まれた、などとする言説がある¹¹。啓（禹の子）と混同したらしい記述も。

◆西羌出身説は前漢初期以来複数の文献に確認できる。なお、西方（「西王国」）で学んだ、とする説もある。一方、石との関わりについては、西方の崑崙や「石夷」に触れた文献、石からの生誕を記す書物がある（ただし疑問を伴う事例も存在）。「石紐」を明記する事例は前漢末（揚雄の時期）以前に確認できない。

★第一章小結

- ・禹が西方の「異民族」出身であるとする説は比較的早くから存在した。また、異常出生説や、石に関わる誕生譚も前漢時代までに出現していた。
- ・「石」からの出生（ないし石との関わり）、といった要素も複数の文献に見えている。
- ・一方、具体的な出生地については高密、塗山といった説が確認できるも、「石紐」に関連付ける言説は揚雄の時期（前漢末）以前には確認できず。

第二章 「禹生石紐」説の分析

本章では、諸書に見える「禹生石紐」説を時系列的に整理検討し、伝承の成立過程及び「石紐」の所在する四川地域との関連を明らかにする。

(1) 諸書に見える「禹生石紐」説

A. 4世紀前半／西晋まで

- ▼趙曄『吳越春秋』卷6 越王無余外伝（佐藤武敏訳注、平凡社／周生春輯校、基本典籍叢刊、中華書局）
鯀娶於有莘氏之女、名曰女嬉。年壯未孳。嬉於砥山、得意苴而吞之、意若為人、所感因而妊孕、剖脅而產高密。**家於西羌地曰石紐。**石紐在蜀西川也。
* 「高密（山東）で生誕、石紐で成長」
- ▼袁宏『後漢紀』章帝下・元和三（86）年（基本典籍叢刊、中華書局）
（鄭）弘對曰、「虞舜出於姚墟、**夏禹生於石紐**、二聖豈復出於三輔乎。……。」
※高級官僚の採用を三輔出身者に限ってはどうかとする章帝の提案に対し、「首都圏」以外に生まれた聖人もいるとして反論。なお、范曄『後漢書』は該当部分を収録せず。
→当時、石紐の具体的位置について共通認識があったと推察される¹²。（姚墟は現在の濮陽か：『括地志』）
- ※范曄『後漢書』列伝73 逸民戴良伝
（戴）良曰「我若仲尼長東魯、大禹出西羌……。」
- ▼後漢熹平二（174）年 胸忍県令景雲碑 [2004年に重慶市雲陽県出土]
〈碑主の系譜について述べた部分〉先人伯況、匪志慷慨。術禹石紐、汶川之會、幃屋甲帳、龜車留遺、家于梓潼、九族布列。 → (2) で精査
- ▼陳寿『三国志』卷38 秦宓伝（盧弼集解、上海古籍出版社）
（秦宓曰）**禹生石紐、今之汶山郡是也。**昔堯遭洪水、鯀所不治、禹疏江決河、東注于海、爲民除害。生民已來、功莫先者。（此其二也。）

▽裴注：帝王世紀曰、「鯀納有莘氏女曰志、是為脩己。上山行、見流星貫昴、夢接意感、又吞神珠、臆圯

胸折、而生禹於石紐。」**譙周蜀本紀**曰、「禹本汶山廣柔縣人也、生於石紐、其地名劓兒坪、見世帝紀。」
※劉備が益州を平定した後、広漢太守が郡内に住む秦宓の招聘を試みたが、秦宓は病と称して応じなかった。そこで太守は秦宓の下を訪れて歓談した。その際に益州の来歴が話題となり、秦宓は太守に対し、土地の歴史を説明した（引用部はその二件目）。

裴注は譙周の『蜀本紀（蜀王本紀？）』を引く。（→第三章で検討）

▼皇甫謐『帝王世紀』（徐宗元輯、中華書局）

・鯀納有莘氏女曰志、是為脩己。上山行、見流星貫昴、夢接意感、又吞神珠、臆圯胸折、而生禹於石紐。
（前掲『三国志』裴注所引佚文）

※『藝文類聚』卷10所引佚文：「……胸折而生禹」まで。『藝文類聚』卷11所引佚文：「生禹於石紐」相当箇所を「生於石坳」（坳：くぼみ）に作る¹³。

・帝堯生石乳、禹生石紐。（『北堂書鈔』卷1所引佚文）

・禹、姒姓也。其先出顓頊、顓頊生鯀。堯封為崇伯、納有莘氏女、曰志。是為修己。見流星貫昴、又吞神珠、意感而生禹於石紐、名文命字高密、長於西羌。西夷人也。堯命以為司空、繼鯀治水、十三年而洪水平、堯美其績、乃賜姓姒氏、封為夏伯。故謂之伯禹。及堯崩、舜復命居故官。禹年七十四、舜始薦之于天、薦後十二年舜老、始使禹代攝行天子事、五年舜崩、禹除舜喪、明年始即眞、以金承土都平陽、或都安邑、年百蔡崩于會稽。始納塗山氏之女、生子啓即位。（『初学記』卷9所引佚文。『太平御覽』卷82所引佚文ほぼ同）

B. 4 世紀後半／東晋

▼『華陽国志』卷三蜀志佚文（『統漢志』蜀郡広柔県条注：劉琳校注、巴蜀書社／任乃強校補図注、上海古籍出版社／東洋大学訳注稿（3）-〔20〕） ※「はじめに」引用典拠

夷人營其地、方百里、不敢居牧。有過、逃其野中不敢追、云畏禹神、能藏三年、爲人所得、則共原之、云禹神靈祐之。

※酈道元『水経注』（王先謙校、巴蜀書社／陳橋驛校、杭州大学出版社）

【水経】沫水出廣柔徼外。

【注】縣有石紐郷、禹所生也。今夷人共營之、地方百里、不敢居牧、有罪逃野捕之者、不逼能藏三年、不為人得、則共原之言大禹之神所祐之也。

C. 5 世紀／南北朝時代以後

▼『宋書』卷二七符瑞上（中華書局修訂本）¹⁴

禹有夏氏、母曰脩己、出行見流星貫昴、夢接意感、既而吞神珠。脩己背剖、而生禹於石紐。

▼南朝宋・任豫『益州記』（『太平御覽』卷57所引）

廣平有石紐林。禹生處也。地方百許里、今人猶不敢居止。

▼南朝陳・顧野王『輿地志』（『太平御覽』卷165所引／上海古籍出版社輯注）

石紐、地名。夏禹所生之地。

▼北周建德三（574）年 車騎大將軍婁公神道碑（『文苑英華』卷906所収）

（銘曰）……紫泥賜丹、黃腸贈行。途登石紐、路入金城。寒關樹直、秋塞雲平。……

※四川駐屯経験者の墓碑における銘文。

▼『元和郡県志』卷三三汶川県（中華書局）

・廣柔故縣。在縣西七十二里、漢縣也。屬蜀郡。禹本汶山廣柔人、有石紐邑、禹所生處。今其地名劓兒畔。

※『輿地紀勝』卷一四九・一五二

（茂州汶川県景物）石紐村、（石泉軍景物）石紐山¹⁵

◆後漢～三国時代には禹と石紐を結びつける言説が成立し、故事／由緒として参照されていた。

◆西晋時代の『帝王世紀』は「禹生石紐」説を組み込んで禹に関する伝承を整理した。四川では揚雄？／譙周『蜀王本紀』や常璩『華陽国志』は本説を載せ、以後、地方志・地理書などに散見。

（2）検討を要する諸論点

A. 初出について：

・揚雄『蜀王本紀』？ …揚雄は紀元前後の人物。『吳越春秋』の趙曄（1世紀後半頃？）よりも早い。

→揚雄『蜀王本紀』は譙周『蜀王本紀（または蜀本紀）』を揚雄に仮託したものとする指摘がある¹⁶。

※譙周（3世紀、270没）

*蜀地の先賢として司馬相如・嚴君平・揚雄らを挙げる慣行は後漢中期には既に存在（成都出土李君碑（133年）など）¹⁷

*一方、蜀地に関する先賢・耆旧伝などの文献は後漢後半期から編纂活発化¹⁸。

・趙曄『吳越春秋』の成立 …趙曄は生没年未詳。ただし杜撫に師事し（『後漢書』列伝69下・本伝。習得したのは韓詩）、杜撫は建初年間に没（建初：76-84、『後漢書』列伝69に「定韓詩章句」／『華陽国志』卷10に「治『五經』」とある）。

→杜撫は犍為資中（現四川省資陽市。『後漢書』本伝は武陽とする）の人。郷里で私塾を開いた。会稽山陰の人・趙曄は犍為資中に遊学して杜撫に学んだ。20余年郷里に帰らずに学問を修め、山陰に戻って『吳越春秋』を著述。

→揚雄『蜀王本紀』の年代に疑問があるとしても、「禹生石紐」説が後漢初期に四川などで流布していたと考えることは可能と思われる。

◆「禹生石紐」説は、後漢初期までは遡り、最初期から四川地域の学術文化との関わりが想定される。

B. 地域的な学説？

・鄭弘の発言は章帝とのやりとりの中で発せられた（元和三（86）年）。本事例の場合、四川地域との関連は希薄（鄭弘は会稽山陰の人）。

・緯書説¹⁹における禹の伝承

▼『尚書中候考河命』（清・喬松年輯『緯攷』／重修緯書集成）

修己剖背、而生禹於石紐、虎鼻彪口、兩耳參鏤、首戴鉤鈴、匈懷玉斗、文履己、故名文命、長九尺九寸、夢自洗河、以手取水飲之、乃見白狐九尾。

※『遁甲開山圖 榮氏解²⁰』（『太平御覽』卷360）

女狄暮汲於石紐山下、大祠前水中得月精如雞子、愛而含之、不覺而吞、遂有身、十四月而生夏禹。

※『尚書帝命驗』（『太平御覽』卷82）

禹白帝精、以星感。脩紀、山行見流星、意感栗然、生似戎文禹。

→『帝王世紀』佚文の説話と共通点が多い。『帝王世紀』に先立ち一部の緯書に禹の出生を「石紐」と結びつけて語るものが存在したか。

◆緯書説は後漢時代に（全国的に）流行したものであるが、その中に「禹生石紐」説（またはそれに関連する）記述が見える。「禹生石紐」説の由来と考えるべきか。

なお、緯書説は四川においても盛んに教習された（後述）。

C. 四川地域と「石紐」

▼後漢熹平二（174）年 胸忍²¹県令景雲碑 [2004年に重慶市雲陽県出土]

→胸忍県令の景雲（1世紀に没。広漢梓潼の人）の顕彰を目的として、約百年後にやはり胸忍県令となった雍陟（広漢梓潼の人）が熹平二（173）年に立碑。胸忍県は現雲陽県、梓潼県は現綿陽市梓潼県（碑主の系譜について述べた部分）

先人伯況、匪志慷慨。術禹石紐、汶川之會、幃屋甲帳、龜車留遯、家于梓潼、九族布列。

[試訳]（碑主の）祖である伯況は、剛毅な性格であった。（蜀の地では）禹の石紐（に生まれ）、汶川が（運を）集めた（勝地である）とされることを踏まえ、立派な住居に暮らし、格式の高い乗り物（を使う身分となって）、（広漢郡の）梓潼県に本籍を移し、一族はこの地で栄えた（その子孫が碑主の景雲である）²²。

- ・梓潼は四川盆地西北端近くの平野部に位置し、山岳部の広柔（「石紐」所在地）から通口河に沿って下りてきたところにある。



（参考地図：広柔・梓潼・雲陽の位置関係／Google Earth）

* 地理的に近接 + 夷人は季節的に山岳部←→蜀郡・広漢郡など平野部を往復²³

→二世紀後半、広漢梓潼を象徴する由緒として「禹と石紐」の関係が知られていた：

- ・「石紐」は梓潼県近隣の聖地と認識されていた。
- ・こうした認識が成立した背景には、山岳部と平野部を往復する夷人の動きが想定される。

◆後漢時代には、四川地域において、石紐を蜀の地（＝四川）に所在する禹の聖地とする認識が成立していた。「禹生石紐」説には、地域と結びつき、さらにその由緒を顕示する言説という側面が存在したと

思われる。

D. アジールの記述

・「禹生石紐」説を取り入れた記述は唐代までに十件以上確認できるが、その全てがアジールとしての性格に言及しているわけではない。

▼『華陽国志』佚文（再掲）「(夷人) 有過逃其野中不敢追、云畏禹神。能藏三年、為人所得、則共原之、云禹神靈祐之。」

→罪過のある者が禹の聖域に逃げ込んだら追跡せず、(その理由は) 禹神を恐れる(からだ)という。

三年隠れ遂せることができれば、人(=官)に捕らえられたとしても、その者を放免し、禹神の霊がこれを助けたのだとする。

・『華陽国志』佚文 ...『統漢志』、『史記』夏本紀・正義所引

・『水経注』 ...『華陽国志』に依拠した記述か(→唐以後の文献も)

※宋・任豫『益州記』...大きく節略

→伝揚雄『蜀王本紀』／譙周『蜀(王)本紀』がアジールに触れた形跡はみえない。『華陽国志』佚文とそれを参照したとみられる地理書に限られる²⁴。

◆「禹生石紐」説と、同時代の「夷人」の習俗(アジール)はそれぞれ由来を異にする記述と思われる。前者は緯書説や古史の叙述などに見え、アジールの記述を伴わない事例が多い。一方、後者は『華陽国志』以後地理書に書き継がれている。四川地域には、夷人との交流によって禹の聖地での習俗が伝わり、蜀の人である常璩による『華陽国志』をはじめ地理書に記録されたのではないか。

★第二章小結

・「禹生石紐」説は後漢初まで遡り、以後複数の文献や引用に出現するようになる。四川地域に関わりのある文脈で取り上げられることが多いものの、緯書など地域を限定しない文献にも散見する。四川では後漢時代には地域の由緒を説明する故事としてしばしば参照されるようになり、そこに現地の社会状況を背景としてアジールの伝承が加わったと考えられる。

第三章 後漢・三国期の四川地域と禹の伝承

本章では「禹生石紐」説の背景にある地域性／時代性について検討し、本説話の歴史的な性格を明らかにする。

(1) 後漢・三国期の四川社会と学術文化

・四川地域の学術文化とはどのようなものだったのか：

→前漢武帝期に蜀郡太守となった文翁は学堂(≡官立学校)を設立して文教政策を実行。学術の流行や文化水準の向上に寄与したとされる(『漢書』卷89 循吏文翁伝、『華陽国志』卷3 蜀志)。

*ただし、『漢書』卷6 武帝紀に該当記事なし。また『漢書』卷28 地理志の蜀郡関係箇所は循吏伝との間には内容揺れがあり、後代の潤色や誇張の可能性も²⁵。

- ・後漢時代には蜀郡成都の学堂が機能（詩・礼・易・春秋・尚書などの師が存在）、私塾も各地に成立²⁶
→知識人集団が形成され、緯書説含め特徴ある学風（「蜀学」）を育んだ²⁷。
*その学風の中には、郷里の由緒に関する言説が含まれるのではないか？

(2) 四川の知識人と「禹生石紐」説

・第二章で取り上げた後漢末の秦宓は広漢綿竹の人、『蜀（王）本紀』の撰者である三国／西晋の譙周は巴西西充国（漢代の巴郡充国）の人。

▼『華陽国志』卷 10 先賢広漢士女

秦宓、字子敕、綿竹人也。……弟子譙周具傳其業。

▼『隋書』卷 33 経籍志「三巴記一卷 譙周撰」…地理書？

▼『華陽国志』卷 12 序志

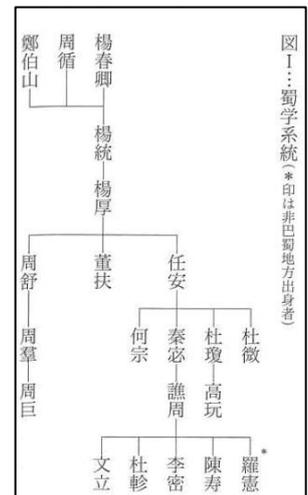
司馬相如・嚴君平・楊子雲・陽成子玄・鄭伯邑・尹彭城・譙常侍・任給事等、**各集傳記、以作本紀、略舉其隅。**

※嚴君平＝嚴遵、陽成子玄＝陽衡、鄭伯邑＝鄭廛、尹彭城＝尹貢、譙常侍＝譙周、任給事＝任熙 →伝記（先賢・耆旧伝など）／本紀（蜀王本紀・蜀本紀・蜀記など）

→譙周も地方文献編纂者の一人に数えられている。

*譙周は劉禪に降伏を勧めたことから、西晋で厚遇された。史書（『古史考』）や『五經論』、『法訓』のほか地方文献（地方史書？）を撰述。

→「禹生石紐」説を踏まえた言説を残した兩名は師弟の間柄であり、学説においても継承関係にあった（右図）²⁸。



・譙周以後の史書／地理書（下線部は内容共通箇所）：

▼陳寿『三国志』卷 38 秦宓伝（蜀地の歴史に関する秦宓の発言。一部既出）

蜀有汶阜之山、江出其腹、帝以會昌、神以建福、故能沃野千里。（〔注〕河圖括地象曰、「岷山之地、上為東井絡、帝以會昌、神以建福、上為天井。」左思蜀都賦曰、「遠則岷山之精、上為井絡、天地運期而會昌、景福盼饗而興作。」）

淮濟四瀆、江為其首、此其一也。禹生石紐、今之汶山郡是也。（裴注省略：第二章前掲）昔堯遭洪水、鯀所不治、禹疏江決河、東注于海、為民除害、生民已來功莫先者、此其二也。天帝布治房心、決政參伐、參伐則益州分野、三皇乘祗車出谷口、今之斜谷是也。（〔注〕蜀記曰、「三皇乘祗車出谷口。未詳宓所由知為斜谷也。」）

▼常璩『華陽国志』卷 3 蜀志譯語

蜀之為邦、天文井絡、輝其上。地理、岷・嶓鎮其域。五岳、華山表其陽。四瀆、則汶江出其徼。故上聖、則大禹生其郷。媾姻、則黃帝婚其女。顯族、大賢、彭祖育其山。……

▼常璩『華陽国志』卷 12 序志

『蜀紀』言「三皇乘祗車出谷口。」秦宓曰「今之斜谷也。」及武王伐紂、蜀亦從行。

*『蜀紀』…撰者未詳。「本紀」の一種か。

→『三国志』が記録する秦宓の表現や、その背景にあるとみられる言説（裴注の引く書物）は『華陽国志』の叙述に組み込まれた。

※夷人の習俗（『華陽国志』佚文）に関する記述はこの段階で付加されたか。

(3) 「禹生石紐」説の歴史的 성격

- ・後漢以後、四川地域では地方政権の成立と遠隔支配（外部に拠点を置く権力の下への統合）が繰り返された。

* 公孫述政権 25-36 → 後漢支配 36-194 (-214/221) → 劉二牧政権 195-214 →
劉備政権／蜀漢 214/221-263 → 曹魏／西晋支配 263-265, 265-302/304 →
成漢 302/304-347 → 東晋支配 347-

→ 統治権の変遷と権力の所在の移動は、地域社会にとって圧力になった。その圧力を避けるためには、統治権力への配慮やアピールが必要であったと考えられる²⁹。

* アピール：由緒ある土地である、当該王朝やその前身への貢献がある、（登用すべき）優れた人材がいる……

- ・「禹生石紐」説はこうした状況に適合する性格を持つのではないか：

- ・「石紐」を含む巴蜀が中心であると主張するわけではない。
- ・「中華」の聖王を（中原からみて辺境に位置する）巴蜀の地に結び付ける。
- ・漢代以来存在するため、ことさら新奇な言説というわけではない。

※ 前例：景雲碑（地域の由緒説明）、秦宓の発言（由緒説明・地域の権威付け）

→ こうした発想は四川地域の知識層に共有され、地方で編纂された文献に「禹生石紐」説が取り込まれたと考えられるのではないかと³⁰。

- ・同時に、上古史への関心は地域を限ったものではない³¹：

- ・ 譙周（270年没）『古史考』
- ・ 皇甫謐（282年没）『帝王世紀』

→ 『古史考』は佚書。『蜀（王）本紀』と異なり、叙述対象地域を限定しない史書か。

* 『蜀（王）本紀』が引く「禹生石紐」説も上古史に関する一説といえる。上古の歴史に関する譙周の知識体系には「禹生石紐」説が含まれていたといえる。

* 『帝王世紀』も対象地域を限定しない書物であり、上古に関する部分で「禹生石紐」説を取り入れている。

→ 四川地域の文化傾向と、一般的学問傾向としての上古史の接点といえる。

（＝四川の知識人からみて、「禹生石紐」説とは、一般的潮流の中で地域の権威性をアピールすることが可能な題材であったか。）

- ◆ 「禹生石紐」説には、民族伝承という側面だけでなく、四川における地域文化（≡ 地域的政治文化³²）と関わる面も存在すると考えられる。その場合、この言説は、上古に遡って地域の由緒や権威性を（体制と衝突しない範囲で）アピールしようとする志向の象徴的事例と位置づけられるのではないかと。

★ 第三章 小結

- ・ 「禹生石紐」説の形成と記録には、後漢以後の四川地域における政治・文化状況が反映されていると考

えられ、とりわけ後漢・三国時代及びその前後における歴史展開から影響を受けたとみられる。この伝承は、民族的言説としてだけでなく、四川地域における社会・文化の様相と密接に関わる言説と位置づけられる。

おわりに

- ・本報告の検討内容を章ごとに整理すると、以下のようになる：
 - ・禹が西方の「異民族」出身であるとする説は比較的早くから存在した。また、異常出生説や、石に関わる誕生譚も前漢時代までに出現していた。「石」からの出生（ないし石との関わり）、といった要素も複数の文献に見えている。一方、具体的な出生地については高密、塗山といった説が確認できるも、「石紐」に関連付ける言説は揚雄の時期（前漢末）以前には確認できない。
 - ・「禹生石紐」説は後漢初までは遡り、以後複数の文献や引用に出現する。四川地域に関わりのある文脈で取り上げられることが多いものの、緯書など地域を限定しない文献にも確認できる。四川では、後漢時代には地域の由緒を説明する故事として取り上げられるようになり、そこに現地の交通を背景としてアジュールの伝承が加わったと考えられる。
 - ・「禹生石紐」説の形成と記録には、後漢以後の四川地域における政治・文化状況が反映されたと考えられ、とりわけ後漢・三国時代及びその前後における歴史展開に影響を受けたとみられる。この伝承は、民族的言説としてだけでなく、四川地域における社会・文化の様相と密接に関わる言説と位置づけられる。
- ・展望（課題）：
 - ・後漢以後の地方文献（地方史料）に関する史料批判的分析
 - ・地域別的視点による漢-唐間の歴史展開
 - ・フロンティア（経典の成立よりも遅れて、後発的に「中華」に組み込まれた空間）における地域文化／政治文化の展開

(注釈)

- ¹ 中島敏夫『三皇五帝夏禹先秦資料集成』(汲古書院、2001年)参照。『史記』については瀧川資言『史記会注考証』(整理本、上海古籍出版社、2015年)、吉田賢抗ほか『史記』(新釈漢文大系、明治書院)、『尚書』については十三經注疏整理委員会『十三經注疏』(北京大学出版社)、加藤常賢『書經』(新釈漢文大系、明治書院)、池田末利『尚書』(全釈漢文大系、集英社)を参照した。
- ² 工藤元男「禹を運んだ道」(工藤元男先生退休記念論集編集委員会編『中国古代の法・政・俗』汲古書院、2019年)、同「禹：犯罪者を庇護する伝説上の帝王」(鶴間和幸編『悪の歴史 東アジア編上』清水書院、2017年)、同「秦簡研究から浮上した禹の行方をめぐって」(『創文』401、1998年)、同「禹の伝承をめぐる中華世界と周縁」(樺山紘一ほか編『岩波講座世界歴史 3』岩波書店、1998年)、同『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』(創文社、1998年)、植村善博・治水神=禹王研究会『禹王と治水の地域史』(古今書院、2019年)、王敏『禹王と日本人：「治水神」がつなぐ東アジア』(NHK出版、2014年)、大脇良夫・植村善博『治水神禹王をたずねる旅』(人文書院、2013年)など参照。
- ³ 工藤元男「禹を運んだ道」(工藤元男先生退休記念論集編集委員会編『中国古代の法・政・俗』汲古書院、2019年)参照。
- ⁴ 陳志良「禹生石紐考」(『説文月刊』1、1937年)、馮漢冀「禹生石紐辨」(『説文月刊』4、1944年)、徐中舒「論『蜀王本紀』成書年代及其作者」(『史学史資料』1979-3)、馮広宏「大禹三考」(『四川文物』2000-2)、段渝「大禹史伝的西部基層」(『四川大学学報 哲学社会科学版』2004-5)など。この時期の研究史については蒙黙「『禹生石紐』続弁」(『西華大学学報 (哲学社会科学版)』2010-4)が参考となる。
- ⁵ 王明珂『華夏辺縁：歴史記憶与族群認同』(増訂・簡体字、上海人民出版社、2020年)、同『羌在漢藏之間：一個華夏辺縁的歴史人類学研究』(簡体字、中華書局、2008年)など参照。早くはEberhardt Wolfram, *Lokalkulturen im alten China*. (Brill, 1942)が「禹生石紐」説に言及し、史料を整理している(Reihe 29-5)。工藤元男による一連の論考(前掲)も参照。
- ⁶ 括弧の範囲(引用の入れ子構造の識別)は瀧川資言『史記会注考証』(整理本、上海古籍出版社、2015年)によった。なお、「字密」を「字高密」とする説もある(後述)。
- ⁷ 楊東晨「論四川大禹故里及其相關問題」(『陰山学刊』2008-2)。
- ⁸ 田小彬「孟子“禹生石紐”説考辨」(『文史雜誌』2019-3)。
- ⁹ 楠山春樹、新釈漢文大系、明治書院、1988年。
- ¹⁰ 中華書局/小竹武夫訳、筑摩書房、1997年/王先謙補注、上海古籍出版社、2008年。開母廟石闕銘は永田英正『漢代石刻集成』(同朋舎出版、1994年)による。毛遠明『漢魏六朝碑刻校注』(線装書局、2008年)も参照。
- ¹¹ 石にまつわる死生観については量博満「岩間葬について」(白鳥芳郎教授古稀記念論叢刊行会編『アジア諸民族の歴史と文化：白鳥芳郎教授古稀記念論叢』六甲出版、1990年)参照。
- ¹² 姚墟と石紐を並べる事例は、降って南朝梁・湘東王蕭繹『法寶聯璧』(『大正新脩大藏經』所収『広弘明集』巻20所引)にも「粵乃書稱湯誥、篇陳夢説、昔則王畿居亳、今則帝業惟揚、功施天下、我之自出。豈與姚墟石紐、譙城温縣、御龍居夏、唐杜入周而已哉」とある。
- ¹³ 禹が「石坳」で生まれたとする説は南朝梁・元帝(蕭繹)『金樓子』(上海古籍出版社校注/中華書局校箋)にも「帝禹夏后氏、名曰文命、字高密。母修己山行、見流星貫昴、意感、又吞神珠薏苡、胸坼而生禹於石坳、夜有神光。長於隴西大夏縣」とある。

14 本文揭示箇所とほぼ同じ文章は今本『竹書紀年』にも見えるが、信憑性に疑問を残すため、ここでは採らないこととした。

15 汶川県は現阿壩藏族羌族自治州、石泉軍は現北川羌族自治县（阿壩自治州の東）か。

16 徐中舒「論『蜀王本紀』成書年代及其作者」『史学史資料』1979-3。蒙文通『巴蜀古史論述』（四川人民出版社、2019年、再版）は、撰者名は仮託、内容は前漢時代の成立とする。中林史朗「古代巴蜀地方について：『蜀王本紀』の世界より」（同『中国中世四川地方史論集』勉誠出版、2015年、該当部分初出1979年）、徐朝龍「古代蜀国史研究の新視点：『蜀王本紀』と『華陽国志・蜀志』との読み比べを通じて」（『史林』79-3、1996年）も参照。

17 藤田高夫「蜀の学堂：漢代成都の郡国学」『關西大學文學論集』62-4、2013年。新津健一郎「後漢西南地域における地方行政と地域文化の展開：成都東御街後漢碑にみる郡学と地域社会」『史学雑誌』128-12、2019年。

18 永田拓治「『先賢伝』『耆旧伝』の歴史的 성격：漢晋時期の人物と地域の叙述と社会」『中国 社会と文化』21、2006年。

19 緯書に関しては安居香山『緯書の成立とその展開』（国書刊行会、1979年）、安居香山『讖緯思想の総合的研究』（国書刊行会、1984年）、安居香山『緯書と中国の神秘思想』（平河出版社、1988年）など参照。

20 『隋書』卷34 経籍志・子・五行に「遁甲開山圖三卷 榮氏撰」とあるも詳細不明。顧炎武は漢代の作とする（『金石文字記』一）。『日知録』卷30「泰山治鬼」における扱いを参考として便宜的にここに配置した。

21 字音には諸説あるが、ここでは碑文の用字を踏まえ、一般的な漢音によりクジンと読んでおく。

22 飯塚勝重「漢胸忍令景君碑」（初拓本）に見る景雲とその周辺」（『アジア文化研究所研究年報』49、2014年）における先行研究整理及び解釈を参考とした。報告者の読みでは原文「術」を「述」（音通）の意と考え、「汶川之會」は『藝文類聚』卷七山部引『河図』佚文に「汶山之地爲井絡、帝以會昌、神以建福、上爲天井」（第三章で引く『三国志』秦宓伝裴注にもほぼ同文の『河図括地象』）を踏まえた表現と解した。

23 『華陽国志』卷3 蜀志汶山郡条残欠。工藤元男「禹を運んだ道」（工藤元男先生退休記念論集編集委員会編『中国古代の法・政・俗』汲古書院、2019年）参照。

24 南北朝時代には四川に関する地理書として宋の任豫、齊・梁の李膺がそれぞれ残した『益州記』が知られ、前者は確実に『水経注』に組み込まれている（鮑遠航「『水経注』所引兩種晋宋巴蜀地記考述」『重慶第二師範学院学報』2014-5）。なお、『華陽国志』（または常璩の著作）は6世紀初まで北朝領内で入手困難であったらしく（『魏書』67）、『水経注』の成立年代（酈道元は527年没）と時期が近い点は問題であるが、石紐関連の言説については任豫『益州記』などを介して認識したと考えることも可能であり、いずれにせよ『水経注』の記述が独自の情報である可能性は低いと思われる。

25 梅村尚樹『宋代の学校：祭祀空間の変容と地域意識』山川出版社、2018年。

26 学師については嚴耕望『秦漢地方行政制度』（中央研究院歴史語言研究所、1961年）、私塾については照内崇仁「後漢時代を中心とする学問授受に関する事例一覧」（『史料批判研究』9、2010年）、同「後漢時代の私塾に関する基礎的考察」（『史料批判研究』9、2010年）、成都の学堂については藤田高夫「蜀の学堂：漢代成都の郡国学」（『關西大學文學論集』62-4、2013年）、新津健一郎「後漢西南地域における地方行政と地域文化の展開：成都東御街後漢碑にみる郡学と地域社会」（『史学雑誌』128-12、2019年）を参

照。

²⁷ 吉川忠夫「蜀における讖緯の学の伝統」(安居香山編『讖緯思想の総合的研究』国書刊行会、1984年)、中林史朗「後漢末・晋初における地方学者の動向」(同『中国中世四川地方史論集』勉誠出版、2015年。初出1990年)、Farmer Michael, *The Talent of Shu: Qiao Zhou and the Intellectual World of Early Medieval Sichuan*. (State University of New York Press, 2007);渡邊義浩「陳寿の『三国志』と蜀学」(三国志学会『狩野直禎先生傘寿記念 三国志論集』汲古書院、2008年)を参照。

²⁸ 図は中林史朗「後漢末・晋初における地方学者の動向」(同『中国中世四川地方史論集』勉誠出版、2015年。初出1990年)による。Farmer Michael, *The Talent of Shu: Qiao Zhou and the Intellectual World of Early Medieval Sichuan*. (State University of New York Press, 2007)も同様の学統図を示すが、史料解釈や漢字の取り扱いに誤りや疑問がある。

²⁹ 『晋書』卷91 儒林文立伝に「泰始初、拜濟陰太守、入為太子中庶子。上表請以諸葛亮・蔣琬・費禕等子孫流徙中畿、宜見敘用、一以慰巴蜀之心、其次傾吳人之望、事皆施行。詔曰「太子中庶子文立忠貞清實、有思理器幹。前在濟陰、政事修明。後事東宮、盡輔導之節。昔光武平隴蜀、皆收其賢才以敘之、蓋所以拔幽滯而濟殊方也。其以立為散騎常侍」、『華陽国志』卷8大同志に「(泰始)二年春、武帝弘納梁・益、引援方彦、用故黃金督蜀郡柳隱為西河、巴郡文立為濟陰太守、常忌河内縣令」とある。しかし、後漢初(「光武平隴蜀」)の場合、実際には鄧氏政権期まで二千石クラス(以上)への任用は低調であったこと(東晋次『後漢時代の政治と社会』名古屋大学出版会、1995年)、泰始以後の任用においても特殊事例を除くと任官した者でもほとんどは五品(それも外任の地方長官)以下であったことが明らかにされている(中林史朗「西晋初期政治史の一断面」(同『中国中世四川地方史論集』勉誠出版、2015年。初出1990年)。

³⁰ この部分については、Farmer Michael, *The Talent of Shu: Qiao Zhou and the Intellectual World of Early Medieval Sichuan*. (State University of New York Press, 2007)が、既に「禹生石紐」説を取り上げ、古典中の人物を地方的な場に結び付けることで権威化を図ったという性格を持つことを指摘している(pp. 132-133)。Farmerの議論は、Chittick Andrew, “The Development of Local Writing in Early Medieval China”(Early Medieval China 9, 2003)を踏まえたものである。このような叙述が流行した後漢末以後の時代的特質について、「經典成立期(先秦～前漢)時代における「中華」の領域や人間集団に変容が生じ、目の前の現実を説明するための經典解釈が必要とされた」と考えれば、この時期の地理書叙述から「中華」領域に対する認識の変化を論じた Jonathan Felt, *Structures of the Earth: Metageographies of Early Medieval China*. (Harvard University Asia Center, 2021)に通じるところもあろうか。

³¹ 渡邊義浩「『古史考』と『帝王世紀』: 儒教に即した上古史と生成論」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』63、2018年)を参照。

³² 「地域社会」について、ここでは漢人を中心としつつ、「夷」も含んで同じ地域に生活拠点を置く人間集団を想定している(中村威也「中国古代西南地域の異民族: 特に後漢巴郡における「民」と「夷」について」(『中国史学』10、2000年)を参照)。また「政治文化」というのは、文献編纂やその背後にある思想を文化的営為としてだけでなく、地域社会にとっての利害を反映し、政治的意図を帯びた現象と考えることによる。